

Matilda as a Literary Criticism and Its Background

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-06-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 安藤, 聡 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/6477

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



文学論としての『マテイルダ』とその背景

安藤 聡

実際に読まれている度合いから言えば、ロアルド・ダール（一九一六―九〇）は疑いなく二十世紀最大の童話作家であると言えよう。英語圏のみならず二〇一五年の時点で五十九か国語で読まれ、主要作品は一通り映画化され、ロンドンのウエスト・エンドではミュージカル版『チャーリーとチョコレート工場』や『マテイルダ』が長期にわたって上演され好評を博している。二〇一六年には生誕百周年を迎え、英国中の多くの書店でその作品が平積みされたり関連書籍の出版が相次いだりしていることが示す通り、死後四半世紀以上を経た現在もその人気はまったく衰えていない。

ダールの代表作の一つは『マテイルダ（マチルダはちいさな大天才）』（一九八八）¹である。ダールは多くの媒体を通して物語の意義や読むことの重要性をさまざまな形で訴え続けたが、その主張が最も分かり易く表現されているのが『マテイルダ』であると言えよう。ここでは親に理解されず軽視されて育つ主人公の天才少女マテイルダが、自分を否定する両親や校長と戦い、図書館司書や担任教師など心ある大人に見守られて成長する。マテイルダが読んだ本のリストはその

まま読者にとって読書案内としての意味を持ち、同時にこの作品をダールの文学論、物語文学擁護論としても読むことが出来る。本稿では『マテイルダ』からダールの文学論を読み取り、この作品を通してダールが主張した物語の意義や、作品の時代的、風土的背景について考えたい。

一 大人の横暴に知恵で抗う天才少女

一歳半で完璧に話すようになり三歳前に独学で読むことを覚えたマテイルダは、両親のワームウッド夫妻にその能力を理解されず家庭内で冷遇されている。父親のワームウッド氏は詐欺師に等しい中古車販売業者で、母親は毎日「八マイル離れた町でビンゴゲームに没頭している」（一六）。ワームウッド家には一冊の料理本を除いて本が一切なく、夫妻と凡人の兄マイケルは四六時中テレビを見て過ごす。料理本を読み尽くして暗記してしまったマテイルダが本を買って欲しいと訴えても父は「何のために本が必要なのか」、「テレビの何が不満なのか」と言って取り合わず（一六）、やがて彼女は一人で村の図書館に通い詰めるようになり、四歳と三カ月にしてそこ

にあった児童書をすべて読み尽してしまう。そのことに気づいた司書ミセス・フェルプスはマティルダの求めに応じて大人向けの文学作品の中から名作を次々紹介する。

「ワームウッド (wormwood)」は「ニガヨモギ」を指す一般名詞であり、「苦惱(の種)」「不快な経験」の意味をも持つ。『マティルダ』の冒頭はまず子供を溺愛し過大評価する「親馬鹿」を糾弾する記述で始まるが、それに続いて「時々それと正反対の、子供にまったく無関心の親がいて、もちろん溺愛する親より遥かに質が悪い」と語り手に言わせている(四)。ワームウッド夫妻はダールに特有の誇張表現によって、「ニガヨモギ」「苦悩の種」「不快な経験」というイメージを伴って徹頭徹尾忌み嫌われるべき親として描かれるが、ワームウッドという姓からC・S・ルイスの『悪魔の手紙』の若い悪魔を思い出す読者も少なからう。この夫妻はマティルダにとっても多くの読者にとっても悪魔に等しい存在であるに違いない。

両親の無関心のために就学が遅れたマティルダは五歳半で近隣の小学校に入学する。そこは校長ミス・トランチブルの暴力的な独裁によって運営されていて、マティルダの最大の理解者である担任教師ミス・ハニーがマティルダの能力をいくら評価しても校長は聞く耳を持たずその才能を決して認めない。これまでは家庭内で両親(特に父)に知恵で対抗していたマティルダは、学校では級友らと自分をトランチブル(本文中では主に「ザ・トランチブル」)の暴力から守るために

その知能を使うことを余儀なくされる。やがてトランチブルはミス・ハニーの叔母であることと、ミス・ハニーの財産権がトランチブルによって不当に奪われていることを知ったマティルダは、敬愛する教師を救うべく「特殊な」能力を行使することになる。

『マティルダ』では基本的に、例えば『チャーリーとチョコレート工場』や『魔女』、あるいは『BFG』などと異なり(魔法めいたチョコレート工場、魔女や巨人の存在といった)空想的、非現実的な要素が設定されていない。ワームウッド夫妻の愚かさやトランチブルの暴力はいささか常軌を逸しているものの、それは現実世界に起こり得る事件や現象の過度な誇張に過ぎない。『マティルダ』におけるファンタジー的要素は第十四章(本作品では章に番号が付されていないので、これは前から十四番目の章を意味する。以下同様)でマティルダ自身も意識することなく発揮する目の力で物を動かす「超能力」に限定され、この能力を使ってこの主人公はミス・ハニーを救済することになる。

マティルダが戦わねばならない相手はつねに大人であり、それは親や教師など子供に対して何らかの権力を持ちそれを濫用する者たちである。父が実際のところ詐欺行為によって利益を得ていることを知ったマティルダがそれを「自分を信用する人を騙す」「嫌悪すべき」(一九)行為だと非難すると父はマティルダを罵倒し、それに対して復讐を誓った彼女は父の帽子に接着剤を仕込み、父は自慢の髪を刈り取らざるを

得なくなる。それから一週間後、マティルダが本を読んでいることに腹を立てた父がその本（図書館から借りたもの）を取り上げて引き裂くと、マティルダは言葉を話すオウムを友人フレッドから借りて来て暖炉の煙突に隠し、煙突から聞こえるオウムの声で父（と母と兄）を恐怖の底に突き落とす。さらに約一週間後、車の売上金を即座に暗算したマティルダを嘔吐き呼びわりして罵ったことに對してマティルダは、父の染毛剤に仕掛けを施して父の自慢の黒髪を「汚い銀色」（五六）にしてしまふ。いずれの場合にもマティルダは父の横暴に知恵で對抗し、ナルシシストの父が醜態を晒す結果に至らしめている。トランチブルに對しては、この暴力教師が自分の兄マグナス（ミス・ハニーの父）を暗殺して屋敷と財産、それにミス・ハニーの相続権を剥奪したらしいことを知ったマティルダが、その超能力を使ってチョークを動かし、黒板にマグナスからトランチブルへの「警告の手紙」を書くことでトランチブルを学校と屋敷から完全に排除する。ここにはミス・ハニーの入れ知恵は一切なく、これはマティルダが独自に考えて実行したことに他ならない。

ダールは賛否両論が拮抗する作家で、一般にダールを評価しない批評家や読者はその「残酷性」とともに「大人を子供敵として描くこと」を批判することが多い。だがよく読めばわかるように（よく読まなくとも明白なはずだが）、大人の中の最も悪質な一部分が子供と「敵対して」いるに過ぎないのであり、そこにはつねに子供を理解する優れた大人が同時に存在している。『マティルダ』においてそれがミセス・フェルプスとミス・ハニーであることは言うまでもない。例えば『チャーリーとチョコレート工場』において主人公チャーリーと他の四人の「嫌悪すべき子供たち」を隔てる要素はチャーリーの「賢明な受動性」²であると同時に、愚かな大人（親）によって甘やかされていないという事実である。マティルダが凡庸な子供と異なるもう一つの点は、これほどまでに愚かな親に育てられているにも拘らず墮落することなく育つていることであると言えよう。

二 マティルダの読書とダールの文学論

ミセス・フェルプスがマティルダに推薦する一連の図書にはデイケンズ（『ニコラス・ニクルビー』と『オリヴァー・ツイスト』）、C・ブロンテ（『ジェイン・エア』）、オースティン（『高慢と偏見』）、ハーディ（『ダーバーヴィル家のテス』）の他にキプリング（『少年キム』）、ウエルズ（『透明人間』）、プリーストリー（『友達座』）、グリーン（『ブライトン・ロック』）、オーウェル（『動物農場』）、それに米国の作家三人（ヘミングウェイ、フォークナー、スタインベック）が含まれる（一二）。いくら人並み外れた神童とは言え四歳児に『テス』や『ブライトン・ロック』を読ませることにはいささかの疑問の余地もなくはないが、これはダールの好みを多分に反映した選択であるに違いない。多くの批評家、伝記作家がダールのデイケンズへの傾倒を指摘しているし³、デイケンズ、ブロンテ、

オースティン、ハーディ、グリーン、オーウェルというライオンナツプは英国小説の王道と言つてよい。マティルダはミス・フェルプスに「大人が読むような本物の良書。古典的名作」を読みたいと訴え（九）、この司書はそういう本の代表として『大いなる遺産』を勧め、マティルダがこれを読み終えてディケンズの他の作品を求めたことからこれら一連の図書が推薦され、マティルダはそれを半年で読み終えた。ディケンズばかりでなくグリーンやキプリング、またヘミングウェイなどもダールの愛読する作家であり⁴、またマティルダがミス・フェルプスにこれらの本を推薦してもらう前に読んで児童書の中で最も好きなのは『秘密の花園』ということになっているが、これもダール自身が少年時代に最も愛読した文学作品の一つである⁵。このようなことから、マティルダの読書歴はダール自身の少年時代から成人後に至る読書歴や文学的嗜好を映し出したものであると考えるとよい。

マティルダはこれらの大人向け小説のすべてを理解しているわけでは無論ない。特に男女関係に関する記述を始めとして、理解できない要素も多々あると彼女はミス・フェルプスに話している。だがこの場面でマティルダはヘミングウェイの作品を例に「その語り方が、まるで私もその場所においてそこで起こっていることを見ているような気分させてくれる」と分析し、ミス・フェルプスも「優れた作家は読者をそういう気分させる」と説明している（一二三）。ダールの諸作品にも独特の雰囲気と（特異な設定のものが多く）にも関

わらず）迫真的な臨場感を持つものが多く、またダールが（と言つてよからう）挙げている推薦図書にもヴィクトリア時代のロンドンやウェスト・ヨークシャーのムーア、ウエセックス地方の田園、あるいはインドやメキシコ湾の風景を克明に喚起する作品が含まれている。読書に没頭するマティルダを描写するくだりで語り手は彼女が「ジョウゼフ・コンラッドとともに古い時代の船で航海し、アーネスト・ヘミングウェイとともにアフリカに、ラディアード・キプリングとともにインドに行った。こうしてイングランドの村の小さな部屋の中で彼女は世界を旅したのだった」と語る（二五）。ダールの言う優れた小説の条件の一つは、このようにその物語世界が独特の風景と雰囲気を持ち、それを文章によって読者に実感させることが出来る作品であるということ（つまり読者の想像を強く喚起する力を持つ作品であるということ）であり、それは極めて真つ当な意見であるに違いない。

ダールはまた、物語は何よりも面白くなければならないと常に考えていた⁶。諧諷や誇張、また価値の転倒やアイロニーを基調とするダールのユーモアはいずれの作品でも遺憾なく発揮されているが、『マティルダ』も無論その例外ではない。第七章末尾近くに、マティルダの類い稀な知能と読書量に驚愕したミス・ハニーが好きな本を尋ねる場面がある。ここでマティルダは『ライオンと魔女』を挙げて、「C・S・ルイスさんはとても優れた作家だと思います。でも一つ欠点があります。面白味 (funny bits) がないのです」と答え、ミ

ス・ハニーもそれに同意している（七四～七五）。ルイスの作品（特に『ライオンと魔女』に始まる『ナルニア国物語』）に「面白くない」とは到底思えないが、確かにルイスのユーモアのセンスはダールのそれとは大きく異なる。ルイス作品にはユーモアがないという見解についてマティルダとミス・ハニーという読者が最も共感すべき二人の登場人物が同意しているということは、またこれまでのマティルダの読書歴とダール自身の文学的嗜好がほぼ一致していることを勘案しても、これはダール自身の意見を反映していると考えるのが自然であろう。この文脈でマティルダは「トルキンさんにも面白いところがあまりない」と付け加え、ミス・ハニーはそれにも同意している。ここでミス・ハニーはマティルダに「子供が読む本には必ず面白いことが含まれていなければいけないと思う？」と問い、それを肯定してマティルダは子供にとつての笑いの重要性を指摘している。これは作者がこの主人公に自身の見解を代弁させていると考えられよう。

この話の流れを受けてマティルダは「偉大な物語作家デイケンズ」（二〇）を絶賛していて、彼女がデイケンズを好む理由の重要な一部もまた「たくさん笑わせてくれる」ことである（七五）。ここでマティルダは特に面白い人物としてミスター・ピックウィックを挙げているが、このことは先に挙げたリスト（大人向けの小説を読み始めて最初の六カ月に読んだ本）のちにもこの主人公がデイケンズを好んで読んでいることを同時に示している。いずれにせよ、ここでは文学

作品（特に児童文学）におけるユーモアの重要性が強調されているのであり、それは『マティルダ』の全体的なプロットとも大いに関係すると言えるに違いない。父やトランチブルといった大人の横暴に知恵で抗うマティルダは、相手に身体的な危害を加えるわけでも相手を論理的に論駁するわけでもなく、相手が醜態を晒すよう仕向けて笑い者にするという手段に訴える。「敵」が笑い者になることで、この主人公も読者も大いに溜飲を下げるのが可能なのである。特に児童文学において笑いが重要な理由は、それによって子供を物語に惹きつけて情緒や創造力を育むということだけでなく、それが子供にとつて大人の横暴や社会の矛盾と戦う数少ない手段の一つだからでもある。

三 物語と読書の意義

『マティルダ』のもう一つの重要な主題は読書の重要性と物語の意義である。多くの批評家や伝記作家が指摘するとおり、ダールは幼少の頃に母や母方祖母がノルウェイ語で語る民話や伝説を聞いて育ち、そこから多大な影響を受けている⁷。またダールの卓越した記憶力が作品に大きく寄与していることを指摘する声も少なくない。ダールが子供の目から見た世界を臨場感を持って描けるのも子供の気持ちに共感して書けるのもその優れた記憶力のゆえであろうが、同時に幼年時代の自身にとつて母や祖母の物語がいかに「面白く」いかに重要な意味を持っていたかをよく覚えていたからこそ、物語

の重要性をこれほどまでに説得力を伴って説くことが出来るのである。口頭にせよ文字にせよ物語が言語能力や想像力、それに思考力を育む上で不可欠な経験であることは言うまでもない。『チャーリーとチョコレート工場』においてチャーリーのもう一つの「強み」は毎晩二組の祖父母から昔話（そこにはウィリー・ウォンカ氏のチョコレート工場の秘密の一端をも含む）を聞いていたことであり、『魔女』の主人公の少年もノルウェイに住む祖母から魔女についての物語を聞いていたゆえに危険な状況から生還している。理想的な父と息子の関係を描いた『ダニーは世界のチャンピオン』のダニーの父も卓越した語り手であり、『BFG』の「優しい巨人」も『ニコラス・ニクルビー』を繰り返し読むことで読解力を高め、最終的にはディケンスとシェイクスピアの全作品のみならずさまざまな名作文学を読破することになる。

ワームウッド夫妻が親として最低であるもう一つの理由は、子供に本を読むことを教えず（自身が読まないのだから教えられるわけがないが）、在宅時には常にテレビを見ているばかりでなくマティルダにもそれを強要することである。第九章でミス・ハニーがマティルダの将来について相談するべくワームウッド邸を訪れた際にも夫妻は米国製のメロドラマ（日本語で言う「メロドラマ」、すなわち英語の *sage opera*）に夢中で、ミス・ハニーの訪問を迷惑に思い、話に応じることもなく追い返す。この夫妻は過度にテレビに（それも例えば世界情勢に関する報道や科学、文学、歴史、芸術

などに関する番組ではなく低俗この上ないドラマに）耽溺したために想像力が衰退し墮落した人間の見本であると言える。テレビの前に貼り付いて過ごすことは本を読む機会を失うのみならず能動的な思考や言語活動の機会をも奪われることになるのであり、それは大袈裟に言えば人間として生きることを放棄するのにも等しい。実際にダールは、テレビを見過ぎることは子供にとって害悪であり、テレビを見ている暇があつたら本に没頭するべきだと考えていた。親が子供に物語を聞かせる機会をテレビが奪っていること、あるいは単に親子の会話の時間をテレビが侵害していることだけを考えたも、テレビ観賞に現を抜かすワームウッド夫妻は批判されるべき存在であるに違いない。しかもワームウッド家では食堂のテーブルを囲んでではなく居間の椅子に一人ずつ座って膝の上のトレイで食事しているが、これは家族の団欒や対話の欠如を意味する。

ダール作品に馴染みのある読者ならここで『チャーリーとチョコレート工場』のテレビっ子マイク・ティーヴィーを思い出すであろう。この少年はテレビが何より好きで、テレビに夢中になっているところを邪魔されると癩癩を起す。第二十七章でマイクは、開発中のテレビ送信機（チョコレートを送信する装置）に手を出したために体が縮んで、そのことによってこの物語から排除される。縮小したこの少年が物語から退場する時に小人ウーンパ・ルーンパが歌う戯れ歌¹⁰は、脱落して行く四人の子供を見送る四つ

の歌の中で最も長く、その三頁以上百行近くに及ぶ歌詞においてテレビがいかに子供を墮落させるかということ、テレビを排除して読書に没頭することがどれほど重要かということが強調されている。小人たちはここで「子供をテレビに近付けないで、出来れば家にはテレビを置くな……テレビは五感を腐らせて、想像力を抹殺し、頭脳を止めて掻き乱し……思考力を錆びつかせ挙句の果てに凍らせる」と歌う。さらにこの歌は「以前は本を読んでいた、生涯の半分は読んでいた、子供の部屋には本がいっぱい」と続き、「頼むからテレビなんか捨て去って、そこに綺麗な本棚を置いて、本をぎっしり詰め込んで……一週間も退屈させれば、子供は本を読み始め……こんな馬鹿げた機械、胸糞悪く薄汚く不純で腹立たしいテレビのことなどすっかり忘れてしまっただろう」と結論して、「マイク・ティーヴィーがその後で元に戻ったかどうかは時間が経たねばわからない、戻らなくとも自業自得」という「追伸」で終わる。ここでは例のダールの誇張によつていささか度を越したテレビ批判が歌われているが、テレビが想像力を殺して読書の機会を奪うという主張は『マティルダ』で表現されている見解と優れて一貫性を持つ。

すでに触れたとおり、ダールはディケンズを始めとする文学史上にその地位が確立した「古典的な」名作を読むことを奨励している。だが一方で彼は、必ずしも古典的名著だけでなく何であれ本を読むことそれ自体が重要であり不可欠であると考えていた¹¹。文学的評価という点ではほぼ黙殺され

ているが子供の間での人気という点ではダールに次ぐイーニッド・ブライトンは（その会話文の多い平易過ぎる文体や類型的な人種、性差の描き方などを理由に）一部の親や教師からダール以上に忌み嫌われていて、ブライトンを推薦図書のリストから外せという意見が昔も今も根強く存在しているが、ダールは「子供が好むから」という理由でこれに強く反対している¹²。そもそも図書館通いを始める前のマティルダが読んでいたのは（ワームウッド家唯一の「蔵書」である）料理本と新聞だけであり、図書館でミセス・フェルプスにディケンズを勧められるまでは児童書を（結果的につまらなかつたものも含めて）片端から読んでいた。ディケンズやシェイクスピアを読むことも当然のことながら重要であるが、それよりも（テレビを見ている暇があったら）何でも良いから本を読み、読むことを習慣化することが不可欠だということである。まずは乱読しなければ自分が好む種類の本を知ることもあるまいし、清濁併せ呑むことによつて初めて良いものを見分けられるようになるということに他ならない。いずれにせよ、子供が夢中になって読むためには何よりも「面白い」本でなければならず、そうでなければ子供の心を捉えることも読書の楽しさを実感させることも出来ないものであり、この意味で文学作品は（特に児童文学は）「面白くなければならぬ」というダールの主張は正しいと言えるのである。ダールは自ら面白い作品を書くことで、また作品を通してその主張を表明することで、児童と図書を仲介することに寄与して

いると言える。ブライトンの作品もこの点では間違いなく子供の読書習慣の確立に貢献しているに違いない。少なくとも低俗なテレビ番組を見ているよりはどんなものであれ本を読んでいる方が遥かに有益なのであり、これがコンピュータやスマートフォンに齧り付いてますます本を読まなくなった二十一世紀の人間にもそのまま有効な警告であることは言うまでもない。

物語を「聞くこと」もまた本を読むことと同様に必要不可欠な経験である。『チャーリーとチョコレート工場』でバケツト家は極貧の状態にあり、当然のことながらチャーリーは本の一冊も買ってもらえないが、前に言及したとおり彼は毎晩祖母から物語を聞くことを日課にしている。これもすでに触れたように『魔女』や『ダニーは世界のチャンピオン』でも祖母や父の物語を聞くことが主人公の物語中での経験の重要な部分を占めている。『マティルダ』では最初の三分の一程度がマティルダの読書と家庭内での出来事の記述に、残りの部分が主に学校での出来事の描写に充てられていて、後半では特にマティルダが読書に没頭する描写が見られないが、この時期に彼女が読書をしなくなったと考えるのは不自然であり、当然のことながら語られない部分で彼女は本を読み続けていたのであるが、どちらかと言えば後半で重要なのは物語を「聞くこと」であると考えられよう。

マティルダが入学したクランチェム・ホール小学校は
ブライマリー・スクール
トランチブルの常軌を逸した暴力によって支配される「異常

な」世界であり、この世界の「異常さ」を当初マティルダは（級友ラヴェンダーとともに）休み時間に上級生ホーテンシアから聞かされることになる。ホーテンシアは校内で最も果敢にトランチブルの暴力に対抗している生徒であり、これまでの数々の無謀な企てとその結果トランチブルから受けた体罰を淡々と語るこの上級生の話にマティルダらは心を奪われ、この「悪戯の技術を頂点まで高め」「自らの四肢と生命を危険に晒すことをも厭わない」「巨匠」「女神」を驚愕の目で見つめてその話に聞き入る（一〇二）。ここでホーテンシアが語る「物語」は文字通り「小説より奇なる事実」であり、これまで想像力によって物語の「現場」を経験して来たマティルダが後半では常軌を逸した「物語」に参加することを余儀なくされるといふことなのである。

マティルダが聞いて巻き込まれるもう一つの物語はミス・ハニーの身の上話である。第十六章でミス・ハニーは放課後にマティルダを村外れの自宅でのあまりに質素なティー・タイムに招き、マティルダの超能力について話し合うつもりがマティルダに促されて自分の境遇（母の死、叔母との同居、父の死、叔母による虐待と財産権収奪、その叔母がトランチブルであること）を語る。ここに至ってマティルダは、ミス・ハニーをこの苦境から救出するために自分の超能力を利用することを思いつく。この話については全てを忘れるというミス・ハニーに対してマティルダは自分の思いつきのことは何も言わず、三つの質問（トランチブルは兄すなわちミス・ハ

ニーの父を何と呼んでいたか、父はトランチブルを何と呼んでいたか、父とトランチブルはミス・ハニーを何と呼んでいたか)に答えてもらうだけで帰って行く(二〇二―二〇三)。第十九章でマティルダは超能力を使う練習を重ね、第二十章でトランチブルの授業の際に眼力でチョークを動かして天国の兄からトランチブルへの「手紙」を黒板に書く。マティルダがこれだけのことを独自に考えて実行できたのは当然のことながら、これまでに数多の本を読んだことで「物語」を自分でも破綻なく組み立てることが出来るようになっていたからであろう。

四 悪しき現代とイングランドの伝統

常軌を逸した奇想天外な物語世界を誇張して描くダールだが、その思想の根本的な部分は極めて穏健で保守的であると言える。ピーター・ハントは(『チャーリーとチョコレート工場』を論じる文脈で)ダールが提示しているのは「十九世紀的な道徳物語」であり、そこでは怠惰な子供、愚かな子供、甘やかされた子供が徹底的に戒められていると指摘する¹³。ジャッキー・E・ストールカップもダールが多くの作品において「保守的な、大人が喜びそうな教訓」を「無力な子供が最終的に勝利する破壊的な物語に包」んで表現していると言¹⁴。『マティルダ』もまた一面では、最も悪い意味で「現代的な」親を批判的に描き名作文学を読むことを奨励する「保守的な」作品である。アン・オールストンが指摘するとお

り、本を読まずにテレビを好みTVディナー(電子レンジ食品)などの安直で栄養価の低い食事を供するワームウッド夫妻は「現代の家庭の否定的イメージを体現する」¹⁵。テレビや電子レンジを始めとする家電製品の英国での一般家庭への普及は一九五〇年代以降のことであり、また悪質な中古車販売業者という存在も自家用車が普及した二十世紀中葉以降の時代の落とし子であろう。このような意味でワームウッド家は最も悪い意味で現代的な下層中産階級家庭の典型なのである。これをもう少し写実的に描いたのが『ハリー・ポッター』シリーズのダーズリー家であると言えるかも知れない。

オールストンは同時にミス・ハニーに「イングランドの薔薇」(English Rose: イングランドの伝統的理想的女性像)のイメージを、彼女が住む村外れのコテッジに「イングランド的伝統」(Englishness)の表象としての意味合いを読み取っている¹⁶。彼女が伝統的な教育方法を実践し良書を読むことを奨励する「まともな」教師であることは言うまでもない。彼女は第九章でワームウッド邸「コウジイ・ヌーク」(Cosy Nook: 「居心地の良い片隅」の意)を訪れた際、表札に記されたその名称を見て「ノウジイ・クック」(Nasty Cook: 「詮索好きな料理人」の意)というスプーナリズム(語頭の音素が入れ替わる言い間違い、また故意にそれを行う言葉遊び)¹⁷を思い付く(八六)が、これは彼女の言語への関心や想像力や知的好奇心の強さを示すとも解説できよう。これらの資質が教師にとって、また人間として生きる上で極めて重要であ

ることは言うまでもない。ミス・ハニーはまたデイラン・トマスの詩を愛唱し、極貧ながらも伝統的な生活を営んでいる。彼女が住む電気もガスも水道もない平屋建てのコテッジを見たマティルダは「グリムやアンデルセンの本の挿絵のよう」だと思う（一八〇）が、ここは実際にかつて農場労働者が住んでいた古いコテッジである。そのくすんだ赤煉瓦や窓が小さいこと、また櫛の巨木（これ自体がイングランドの伝統的象徴である）に守られるように建っていることも、このコテッジの古さとイングランドらしさを暗示する特徴に他ならない。いずれにせよ、ワームウッド夫妻が最も悪い意味で「現代的な」人間を代表する一方で、ミス・ハニーは（その若さにも拘らず）最も良い意味で「伝統的な」人間の代表なのである。

ミス・ハニーはこのように伝統的な田園生活者であり、この意味でも「現代的な」生活に耽溺するワームウッド夫妻と極端な対照をなす。作品中で舞台となる村の名前には言及がないものの、マティルダの母が毎日ビンゴゲームに通っている「八マイル離れた町」はエイルズベリー（バッキンガムシャー州）であることが明言されている（二〇）ので、この町から八マイルに位置する小学校と図書館を擁する規模の村となると、ダールが新婚時代から晩年までを過ごしたバッキンガムシャー州のグレイト・ミセンデンしかあり得ない（エイルズベリーから八マイルというとハーフォードシャー州のトリング、オクスフォードシャー州のタイム、ベッドフォ

ドシャー州のレイトン・バザードも該当するが、これらはみな村ではなく町である）。村とその周辺の風景描写は作品中にあまり見られないが、ミス・ハニーのコテッジに向かう途中の場面には生垣にブラックベリーやサンザシが実を結びセンニンソウが咲き誇る秋の午後の情景が描写されている（二七五）。おそらくはダール自身の馴染みのあるグレイト・ミセンデンの村外れ（チルターン丘陵）の田園風景を念頭に置いて書かれているのであろう。児童文学作家ピアース・トーデイはダールの生涯と作品双方にとつての田園（と造園）の重要性を指摘している¹⁸。トランチブルを排除したのちの最終章で、屋敷「レッド・ハウス」を取り戻したミス・ハニーはマティルダを最上級のミス・プリムゾルのクラスに「飛び級」させ、教師としてではなく身近な大人の中で最大の理解者としてこの少女に接することになるが、レッド・ハウスでの午後のティー・タイムを二人で過ごすことを日課にするなど、イングランドの伝統的な上層中産階級の田園生活を保持している。父親の詐欺行為が発覚し、両親がスペインへの逃亡を決意した時にマティルダがミス・ハニーの許に駆けつけた場面でも彼女はレッド・ハウスの庭で薔薇の手入れをしていた。

物語は最終的に、両親が長男マイケルを連れて逃亡し、マティルダは自らの意思でこの村に残ることを選択し、ミス・ハニーがマティルダを引き取って保護者となる、という形で幕を閉じる。この場面でマティルダはミス・ハニーとレッ

ド・ハウスで暮らしたいという強い意思を表明し、ミス・ハニーは両親がそれを承認しなければ自分はマティルダを引き取ることは出来ないと言すが、ここではワームウッド夫妻が「試されて」という解釈できよう。ここでマティルダを連れて行く主張すればこの両親にはまだ見込みがあるものの、彼らは迷わずマティルダを捨てて逃亡する道を選択している。この物語を例えばデイズニーが映画化したなら、おそらくこの結末は改竄されて「親子の和解」という陳腐な「ハッピー・エンディング」に作り変えられてしまうことであろう（デイズニーには『ピーター・パン』や『メアリー・ポピンズ』にまで「親子の和解」という原作と無関係な主題を強引に捻じ込んだ「実績」がある）。だが英国の児童文学において親子の絆というのは伝統的にそれほど重要な主題ではない。『秘密の花園』のメアリーや『思い出のマーニー』のアンナ、あるいは『ハリー・ポッター』シリーズのハリーを始めとして、児童文学の主人公には孤児が少なくないし、また孤児でないとしても例えば『ライオンと魔女』の兄弟姉妹や『トムは真夜中の庭で』のトムのように何らかの事情で親元を離れて（たいていは古い屋敷に滞在して）いる時に非現実的な冒険を経験する子供の物語も非常に多い。『ピーター・パン』のウェンディと二人の弟は両親と同居しているが、ピーター・パンは両親の留守中に子供部屋に現われる。二つの『アリス』物語にはアリスが孤児だとは書かれていないが、かと言って両親が存在するの否かさえ明確にされてはいない。『トム・

ブラウンの学校時代』からブライトンの代表的な作品を経て『ハリー・ポッター』に至る全寮制学校を舞台にした物語も英国の児童文学に顕著な「伝統」の一つだが、これも主人公の子供を親元から引き離すための装置に他ならない。このような「親の不在」は英国の児童文学の伝統と言ってよからう。ダールの作品でも『ジェイムズと巨大な桃』や『魔女』の主人公は物語の冒頭で孤児になっているし、『チャーリーとチョコレート工場』のように主人公の両親がともに健在であってもチョコレート工場に行くという「非現実的経験」を共にするのは祖父であって父でも母でもない。父と子の絆を描いた『ダニーは世界のチャンピオン』などはむしろ「例外的な」作品と考えた方がよからう。このような意味で、若い少女が自らの意思で両親を見限るといって『マティルダ』の結末は、一見したところ常軌を逸した突飛な幕引きのように見えるかも知れないが、英国児童文学の伝統に即した正統な大団円と言ってもよいのである。本の一冊も買わずに与えてくれないような親と不慣れた外国で生活してマティルダが幸福になれるとは到底思えないであろう。そもそも彼女が両親の考え方に疑問を持ち、最終的に両親の悪影響から脱することが出来たのも、第二章の末尾近くで明言されている通り「多くの本を読んだことよって両親が知らない人生観を習得した」からであり、「両親が少しでもデイクンズやキプリングを読んではたら、人を騙して儲けることやテレビを見ることよりやるべきことが人生にはあると気づくはず」だったのである（二二

（二二二）。

マティルダが両親ではなくミス・ハニーを自分の保護者として「選んだ」ことは、一面では「悪しき現代」と「伝統」という選択肢のうち後者を選んだということでもある。外国とイングランドの間でイングランドを選択したということでもあるし、テレビと本の間で迷わず後者を選んだということでもあるに違いない。『マティルダ』では一貫して二十世紀後半の「同時代的な」生活様式が批判に晒され、テレビや電子レンジが普及する以前の、人々が古い物語を聞いて多くの本を読んで伝統的な方法で生活していた時代の価値観や人間の在り方が賞賛されていると解読できよう。

註

1. Roald Dahl, *Matilda* (London: Puffin, 2001). 作品からの引用は、この版の頁数を本文中に（ ）で記す。
2. 『チャーリーとチョコレート工場』におけるこの主題については拙論「ロアルド・ダール『チャーリーとチョコレート工場』——〈賢明な受動性〉と想像力」『言語と文化』（愛知大学語学教育研究室、二〇〇八）三七～四六頁を参照されたい。
3. Michael Rosen, *Fantastic Mr Dahl* (London: Puffin, 2012), p. 55; Catherine Butler, 'Introduction', Ann Alston and Catherine Butler eds, *Roald Dahl* (Basingstoke: Palgrave Macmillan, 2012), p. 7; Pat Pinsent, 'The Problem of School: Roald Dahl and Education', Alston and Butler, *op. cit.*, p. 70; Dominic Cheetham, 'Dahl's Neologisms',

- Children's Literature in Education* 47.2 (Cham: Springer, 2016), pp. 98-99; Donald Sturrock, *Storyteller: The Authorized Biography of Roald Dahl* (New York: Simon & Schuster, 2011), p.55.
4. Sturrock, *op. cit.*, pp. 55, 271.
 5. *Ibid.*, p. 55; Rosen, *op. cit.*, p. 55; Wendy Cooling (ed.), *Dis for Dahl: A Gloriouspious A-Z Guide to the World of Roald Dahl* (London: Puffin, 2007), p. 18.
 6. Rosen, *op. cit.*, p. 3.
 7. Jeremy Treglown, *Roald Dahl: A Biography* (London: Faber and Faber, 1995), p. 16; Rosen, *op. cit.*, pp. 14-15, 65-66; Cooling, *op. cit.*, p. 132; Andrea Shavick, *Roald Dahl: The Champion Storyteller* (Oxford: Oxford University Press, 2009), p. 4.
 8. 例として Cooling, *op. cit.*, pp. 61, 78; Sturrock, *op. cit.*, p. 40.
 9. Cooling, *op. cit.*, p. 134; Alston, 'The Unlikely Family Romance in Roald Dahl's Children's Fiction', Alston and Butler, *op. cit.*, p. 96.
 10. Dahl, *Charlie and the Chocolate Factory* (London: Puffin, 1997), pp. 171-174.
 11. Cooling, *op. cit.*, p. 110.
 12. Treglown, *op. cit.*, p. 248.
 13. Peter Hunt, *Children's Literature* (Oxford: Blackwell, 2001), p. 58.
 14. Jackie E. Stalleup, 'Discomfort and Delight: The Role of Humour in Roald Dahl's Works for Children', Alston and Butler, *op. cit.*, p. 45.
 15. Ann Alston, 'The Unlikely Family Romance in Roald Dahl's Children's Fiction', Alston and Butler, *op. cit.*, p. 93.

16. *Ibid.*, p. 95.
17. スプリーナリズムについての詳細は拙稿「スプリーナーとスプリーナリズム」『語研ニュース』第一二号（愛知大学名古屋語学教育研究室、二〇〇四）一三〜一五頁を参照された。 (http://www.taweb.aichi-u.ac.jp/fgoken/goken_news/pdfs/No12.pdf で閲覧可能)
18. Piers Torday, 'Champion of the World: Roald Dahl's Countryside', *Countryfile*, September 2016 (Bristol and Stingingbourne: BBC, 2016), pp. 38-42.

***Matilda* as a Literary Criticism and Its Background**

Satoshi Ando

Abstract

Roald Dahl's *Matilda* is, in a sense, a manifestation of the author's view on literature: how Matilda, the protagonist, enjoys reading and what she reads seem to reflect not merely Dahl's opinion on the importance of reading but also his liking for literature. The novel also suggests his abhorrence of contemporary lower-middle class lifestyle such as watching vulgar TV programmes and excessively eating TV dinners. The novelist strongly believes that it is essential for children to read good books, and that watching TV with extravagance both robs people of time for reading and opportunity to think spontaneously and damages their imagination incurably. The principal purpose of this article is to deliberate upon Dahl's view on literature seen in *Matilda* and to observe how the latter half of the twentieth-century and traditional English country life as background influence the novel.